【381】

氏　名（本籍）	三添篤郎（新潟県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2608　号
学位授与年月日	平成24年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	チェーン・リアクション －冷戦初期合衆国における学術領域の編成－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	宮本陽一郎
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	佐野隆弥
副　査	筑波大学教授	文学博士	鷲津浩子
副　査	一橋大学教授	博士（文学）	越智博美

論文の内容の要旨

本論文は、J・D・サリンジャー、ジャック・ケルアック、トルーマン・カポーティを始めとする1950年代アメリカ小説について、カルチュラル・スタディーズの手法を用いて、斬新な読解を試みるのみならず、GIビル（1944年）、ヴァネバー・ブッシュの「科学—終わりなきフロンティア」（1945年）、メリトクラシーの母体試験機関ETSの誕生（1947年）、アメリカ国立科学財団（NSF）の設立（1950年）、C・P・スノーによる「ふたつの文化」論（1959年）、アイゼンハワー大統領の「軍産複合体制」演説（1961年）に象徴されるような、同時期の合衆国における学術領域の再編成との、双方向的・複合的な交渉に注目する。これを通じて、文化と学術研究とのあいだの加速された反応（「チェーン・リアクション」）が、冷戦構造そのものを生成したことを大胆に解明するものである。以下の7章により構成される。

第1章「ホールデンの大学受験 --- メリトクラシーの名の下で」は、サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（1951年）のテクストと批評史をメリトクラシーの観点から論じる。学力試験による選抜方式を最優先事項にするメリトクラシーは、大戦直後にハーヴァード大学学長ジェイムズ・ブライアント・コナントを基点に広がり、研究大学への入学者選別方法を転換させることになった。高校生でも若者でもなく、大学受験生として主人公ホールデン・コールフィールドの属性を捉え直すことを通じ、サリンジャーのテクストと、同時代の教育改革（SATの入学者選考への導入）とのあいだの、共通の位相を本章は明らかにする。大学受験を控えているホールデンの思考は、戦後のメリトクラシー社会の勃興を告げるものである。同時に60年にわたるサリンジャー批評史そのものが、メリトクラシーを無意識の前提として成立してきたことを解明する。

コナントがメリトクラシーを研究大学に広めようとしていたとき、同じハーヴァード大学のキャンパスで1946年に誕生したのが音響学である。第2章「戦後の補綴術 --- 核時代における補聴器テクノロジーの言説と表象」は、補聴器に代表される音響学的知が、男性の身体に組み込まれていった過程を多角的に検証する。健全な聴覚を保つことは、共産主義と戦うために必要不可欠な国家プロジェクトであり、また「荒廃した戦後世界」を治癒し、冷戦を立ち上げていくプロセスでもあった。

メリトクラシーの理念のもとに再編された研究大学のひとつコロンビア大学に、GIビルにより入学した

のがジャック・ケルアックである。第3章「対抗するサウンドスケープ ---『路上』における音響ネットワークの生成」は、ビート派がいかにハーヴァード大学から広まった音響学の知を転用しながら、それを対抗文化のネットワーク系に接合していったかを解明する。

第4章「アウター・リミッツ --- 超心理学者ジョセフ・バンクス・ラインのテレパシー研究」は、感情によってつながることの可能性と危険性を科学的に追求したデューク大学心理学部教授ジョセフ・バンクス・ラインに注目する。超心理学の立場からテレパシーの実証に挑んだラインは、CIAとの共同研究から、ビート派の作家、さらにはシリコン・ヴァレーの技術者に至る、驚くほど多様な人的ネットワークを生み出す。

第5章「ティファニーで冷戦を ---『ティファニーで朝食を』における航空旅行の地政学」は、戦後航空旅行政策に目を向ける。第二次大戦後にグローバルな覇権を獲得しようとした合衆国政府は、マーシャル・プランの下部組織に「旅行開発局」を立ち上げ、飛行場の点と点を結び、そのネットワークを通じ民主主義と資本主義のグローバルな波及を促した。冷戦初期の海外旅行政策は、文化領域と連動し映画『ローマの休日』や旅行雑誌『ホリデー』などを生み出すことになる。本章はこのように多数のアクターが織り成す航空旅行政策のネットワークにトルーマン・カポーティの『ティファニーで朝食を』を再配置し、冷戦文学としての特質を多面的に解釈する。

第6章「雨に唄えば --- 気象学者による準戦時体制の形成」は、1946年に初めて人工降雨実験に成功したラングミュアの気象研究が、核研究と隣接関係を結びつつ、ミュージカル映画『雨に唄えば』、カート・ヴォネガットの小説『猫のゆりかご』といった文化領域にまで広範囲に流通していったプロセスを論じる。

第7章「利用可能な未来 --- 未来学の編成とポスト冷戦の設計」では、未来予測を研究目的とする未来学と、文化領域の接点を論じる。もともとランド・コーポレーションで1950年代に着想された未来学は、60年代以降急速に大学に波及し学術的知として整備された。その結晶が、社会学者ダニエル・ベルを議長として合衆国政府によって創設された学際的な研究会「2000年委員会」であり、その知見を活かして製作されたのがスタンリー・キューブリック監督の映画『2001年宇宙の旅』である。本章は未来学の誕生と、冷戦時代のサイエンス・フィクションの接合点を複層的に析出し、ポスト産業社会論に基づいた国家設計を夢みる未来学的な思考が、いかに社会主義との差異を分節化する役割を担ったかを論証する。

結章では、1946年に本格的に始動したアメリカ大学出版局、そして1953年に誕生する米国広報文化局の果たした役割を歴史的に考察する。こうした機関によって、冷戦期合衆国の「チェーン・リアクション」によって形成された知の生産体制はグローバルに発信され、本論文を含む今日の学術研究の基盤を構成するとともに、越えることのできない、あるいは今後越えなければならない限界を形作っていることを明らかにして、本論文は締めくくられる。

審査の結果の要旨

グローバル社会における超大国アメリカ合衆国の位置を批判的に見直す、「ニュー・アメリカニズム」という研究潮流のなかにあって、冷戦文化研究は近年もっとも活発な研究領域となりつつある。本論文は、そうしたなかにあっても出色の学術的成果として評価しうるものである。冷戦を、同時期の文学作品の社会的背景としてではなく、文学と諸学術分野を往還するダイナミズムのなかで構築されたパラダイムとして捉え直すことに成功している点において、画期的な意義を持つ論考と言える。

本論文の文学研究・文化研究として優れている点は、なによりも取り上げる文学的テクストと共鳴する同時代的な知の枠組みを、巧みに読み取る洞察力にある。各章において、驚嘆すべき斬新な切り口が用意され、それがすでに論じ尽くされた感のある作品にも、新鮮な洞察をもたらしている。同時に、大胆な仮説を、膨大な資料調査によって実証的に裏付けていく姿勢が、強い説得力を生んでいる。

本論文に関して、さらに重要な意義として指摘できるのは、ディシプリン（大学を中心とする学術機関における学術領域、およびその背後に措定される、知の認識･生産方法）の歴史を、カルチュラル･スタディーズにおける研究対象として確立した点である。とりわけ超心理学、未来学、気象学といったディシプリンについて、その歴史を体系的に論じた研究は皆無に近く、本論文の学術的価値はきわめて高い。

さらに、こうした学際的な分析・考察を通じ、冷戦期に世界に敷衍した学術研究体制そのものを問題化するところまで、著者の論は深化している。序章において、合衆国の「ニュー・アメリカニスト」たちが提起する今日的な諸問題をしっかりと受け止め、かつ結章において合衆国外における学術研究が、本論部分で分析した冷戦期合衆国の学の再編によって、逃れがたく規定されていることを明らかにしている。今日の日本で展開されるべきアメリカ研究として、本論文は高い自覚に貫かれ、十分な存在意義を持つものである。

壮大な企図をもつ本論文だけに、さらに望みたい点もある。ディシプリンの生成史を通じて、知のネットワークの構造変化を解明することが本論文のテーマのひとつであるとするなら、サイバネティクス、環境学、経済学は、ぜひとも将来的に考察のなかに含めるべきであろう。また同時代の知の編成を踏まえてテクストの読みを深化させていく手法については、章によってその出来映えに若干のむらがあり、とくに第6章については、改善の余地を残している。

以上のような問題点は、本論文の画期的な意義を減ずるものではなく、むしろそれゆえに期待される課題である。

平成24年5月19日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条（1）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。